

『ファレサアの浜』の言語体験

著者	中和 彩子
出版者	法政大学教養部
雑誌名	法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編
巻	119
ページ	127-150
発行年	2002-02
URL	http://hdl.handle.net/10114/3931

『ファレサアの浜』の言語体験

中 和 彩 子

Robert Louis Stevenson の最晩年の小説『ファレサアの浜 (*The Beach of Falesá*)』(1892 年) は、南太平洋の島々での見聞や彼自身の体験に基づいて創作された¹。イギリス人商社員の Wiltshire が、南太平洋のとある島のファレサアというところにおかれた営業所で、若い時分に経験したことを語るといふ体裁をとっている。以下、この作品の概略を簡単に振り返っておこう²。

ウィルトシャーが島に到着するところから物語は始まる。前任者が突然辞めてしまったため、派遣されることになったのだ。それまで駐在していた島では、白人は彼 1 人という孤独な生活で、商売も順調ではなく、辛く苦しい思いをしていた。ウィルトシャーは、新しい島に近づくにつれ、期待に胸をふくらませていく。やがて、身なりのよい 2 人の商人——英語を話す国籍不明の白人 Case と手下の黒人 Jack——がボートで船を迎え、乗り込んで来る。船長の言うには浜では「ひどく評判が悪い」2 人だが、ウィルトシャーは一目で気に入り、特に血統も教育もありそうなケースの話し方にはすっかり魅了される (102-103)。何しろ「4 年も赤道 [近くの島] で暮らしていたから、白人との付き合いが恋しくてならなかったのだ」(102)。ケースはウィルトシャーを温かく歓迎し、経験者らしく必要な情報や助言を与えてくれる。ずばぬけて頭の切れる狡猾な商人であるらしい。

上陸して浜を歩き始めると、ケースがふと思い出したように「あなたに奥さんを世話しなくてはなりませんね」と言う。船を出迎えに着飾って集まっていた娘たちを物色していると、ケースが「あれがきれいだ」と、たまたま通りかかった娘 Uma にウィルトシャーの注意を向けさせる (104)。ウィルトシャーが気に入ると、ケースはウマを「妻」にするための交渉の一切を買って出る。

その晩には、ケースがジャックとともにいわば寄生している Captain Randall のみずぼらしく汚い家で、ウィルトシャーとウマの「結婚式」が執り行われる。しかし、この「結婚」には大きな欺瞞があった。ひとつは、英語を

十分に理解できず、読み書きもできないウマに対するものである。ジャックが牧師を演じて、小説本を聖書がわりにし、再現するに堪えない文言を吐く。しかも、ウマが受けとって大事にしまいこんだ結婚証明書は、ケイスの手になるもので、「…ウマは、ジョン・ウィルトシャー氏と非合法的に一夜結婚すること、そして、ジョン・ウィルトシャー氏は、翌朝この女性を地獄に送るも自由であることを、証明する」と書いてある(109)³。ウィルトシャーは、「もしも宣教師たちが土民たちをそのままにしておいてくれたら、こんな欺瞞の必要はなく、僕は望むだけいくらでも妻を迎えて、良心の呵責なしに、好きなときに捨てることができたのに」とウマに対して恥ずかしく思うが、慣行として受け入れる(109)。しかし、騙されていたのはウマだけではなかった。

ウィルトシャーは、自分とその営業所が人々に避けられていることに気づく。交易によってコブラ⁴を集めるのがウィルトシャーの商売である。誰も近づかないのでは仕事にならない。以前の島での経験から、自分が「タブー」にされている——支配者たちの命令で土地の人々が近づかない——と確信したウィルトシャーは、ケイスに相談する。ケイスはこのあたりの島ではタブーの慣行はないと驚くが、白人として断固闘うことを約束し、一緒に酋長たちに抗議しに行く。会談の途中から、代弁してくれているケイスの旗色が非常に悪くなるのを、ウィルトシャーは見て取る。ケイスの結論は、タブーではなく人々が怖がって近づきたがらないだけだからどうしようもないということだったが、ウィルトシャーには納得がいかない。しかも、ケイスは危険がわが身に及ぶことを恐れ、ウィルトシャーとはもう関わらないという。憤慨して自分からも絶交を宣言したウィルトシャーは、原住民を対等に扱わないという主義を曲げて、ウマに相談してみる。その結果、ケイスの陰謀の存在が明らかになる。実は、ウマはある恋愛事件がきっかけで母親とともにタブー同然の扱いを受けていたのであり、それが結婚したウィルトシャーにも及んでいたのである。ケイスは、ウィルトシャーにはそのことを隠し、ウマに対しては、それを承知の求婚だと嘘をつき、話をまとめたのだった。

この欺瞞を知ったウィルトシャーは、商売よりもウマをとると宣言し、かえってウマとの絆を深めた。そして、たまたまこの地に回ってきた宣教師の Tarleton に依頼して正式な結婚式を行ってもらう。その際、タールトンの話から、ケイスが商売敵であるウィルトシャーの前任者たちを死に追いやったり、追放したりしたという悪い噂が本当だったという確信を得る。

状況にほとんど変化のみられないまま1ヶ月が経とうとするころ、ウィルトシャーは、ケイスが原住民によって、キリスト教におけるサタンにあたるTiapoloかその息子であると考えられていることを、断片的に得た情報から知る。だからケイスだけが、魔物たちの棲みかであるファレサアの東外れの叢林地を無事に入出りできるというのである。彼らによれば、ケイスはその奥にティアポロを礼拝するための教会か、危険な魔物の牢獄かを持っているという。これが、ケイスの影響力の源だったのである。

ウィルトシャーは自ら叢林地を探検し、人々を恐がらせた音や悪魔が、白人の目には子供だましの作り物であることを確認する。ケイスを懲らしめる方法を思いついて浜に戻った途端にケイスに出くわし、にらみ合いになる。互いに相手に撃たれることを恐れて背中を向けられない状況下で、ケイスはこうに言う。「あなたを撃つ気がないことは約束しますよ。撃って何になりますか。あなたは私にとって何の邪魔にもなっていない。あなたは、黒んぼの奴隷みたいに自分でこしらえているコブラ以外には、1ポンドだって手に入らない。…あなたが私を撃つつもりがないと約束するなら、私は手本を示して先に立ち去りましょう」(154)。「ケイスは、僕がコブラを手に入れようものなら撃ってやると言ったも同然だった。…僕にできそうな最上の策は、自分が先に撃つことだ」とウィルトシャーは考える(156)。

ウィルトシャーはその夜、危険だというウマの反対を押しきり、ティアポロを爆破しに向かう。途中、こちらの動きがケイスに悟られたらしいことをウマが知らせに来る。すべての仕掛けを爆破し終えた後、2人は見張っていたケイスに相次いで狙撃されるが、逆に彼を捕えたウィルトシャーは、復讐だと叫びながら刺し殺す。タールトンの指揮下で葬儀や事情聴取がなされる。ケイスは遺言書で、ランドルと黒人ジャックの財産までも自分のサモア人の妻の所有にしていた。ウィルトシャーがそれを買い上げてやる。ファレサアを去らざるを得なくなったランドルと黒人はそれぞれ惨めな生活の末死ぬ。ウィルトシャーは今でもウマをこの上ない妻と思っている。そして、3人の子どものたちのことがあるので本国には帰るつもりはない。

1

白人男性主人公が貿易会社から「奥地」に派遣され、そこでひとりの白人男

性が原住民に対して持っている悪魔めいた影響力を知るという筋立て、また、主人公が時間を経たあとで、現在からの視点も織り交ぜながら語るという形式、その語りが明らかに客観性に欠き、自己主張が強く、ときに事実よりは語り手自身を語ってしまっていること——これらの要素には、『闇の奥 (*Heart of Darkness*)』(1899 年)との類似が強く感じられるだろう。その類似に言及している批評家は多い⁵。中でも Albert Guerard は、その Conrad 論の中で 2 つの作品を細部にわたって比較しうるものとして扱っている⁶。そして、ケイスの彫刻群と Kurtz の頭骸骨群、ケイスの悪魔との交信の真似とクルツの悪魔としての役割の比較や、ケイスとウィルトシャーの対決がただの血湧き肉躍る組討ちにすぎないこと、『闇の奥』のジャングルにある象徴性が『ファレサアの浜』のジャングルには欠けていることなどから、『ファレサアの浜』は心理的洞察に欠いていると断じている。

確かに、『闇の奥』が代表的な帝国主義をめぐる文学作品と分類され、何よりも植民地支配の寓話、つまり植民地の異質性に触れて内面を冒されていく白人をめぐる話という読み方をされるのと比較すると、『ファレサアの浜』は、その全体の雰囲気や滑稽なシーンの多さも手伝って、同じ題材の、未熟なあるいは内面性の希薄な表現という印象を与えるかもしれない。

スティーヴンソン自身は、これを自分の作品中で最高の出来栄えと考えていた⁷。そしてその自負は、ある手紙の中で次のように説明されている。

この物語には、事実がどっさり、そして悪くはない喜劇がいくらか含まれている。初めてのリアリスティックな南海の物語だ。つまり、本物の南海の特質と生活の詳細が書かれている、ということだ。私の見てきた限りにおいて、今まで試みた人は皆、ロマンスに心奪われ、氷砂糖のように甘いまがいのものの叙事詩に終わってしまっていて、全体の趣旨が見失われていた。…私の小さな物語を読んだあとでは、図書館一つ読み尽くしたよりもっと、南海について知ることになるだろう。(1891 年 9 月 28 日 Sidney Colvin 宛)⁸

ロマンス作家として活躍してきたスティーヴンソンは、南太平洋の島に定住し、エキゾチックなものがドメスティックなものへと転化したとき、自信をもってリアリスティックな作品を書き始めるのだ。しかし彼は同時に、この手紙の

続きで、次のような懸念を表明する。

しかし、例の異国風という問題 (the exotic question) が常にある。そしてあらゆるもの、生活、土地、複数の方言——貿易商の言葉、これは、文学的表現とイギリス俗語とアメリカ俗語の奇妙 (strange) な寄せ集めだ。それに、Beach de Mar、つまり土着の英語だ。——それに登場人物たちの商売やら希望やら恐れまでもが、みんな珍奇 (novel) で、多分、歓迎されないのではないだろうか。あの偉大な、凶体のでかい、咆哮する鯨、即ち世間には。(Letters, vol. 7 161)

スティーヴンソンは、徹底したリアリズムのために「エキゾチック」な要素がたくさん入ってしまったことによって、読者への受けが悪くなることを心配しているのである。彼の心配を裏付けるかのように、2年後にこの小説が、ハワイの原住民を主人公とした2つの短編と併せて『南海千一夜物語 (The Island Nights' Entertainments)』として出版されたとき、Edmond Goss がこのような感想をスティーヴンソンに書き送っている。「初めて読んだときは、これらの話の異国風なことに (the exotic air of them) 少々当惑しました——実を言うと、あまり魅了されなかったのです。」⁹⁾しかし、スティーヴンソンには、当時の読者に異国の風物が受け入れられることは、わかっていたはずである。彼自身の『宝島 (Treasure Island)』やHaggardの描くようなエキゾチシズムは、実際に読者の人気を博していた。またそもそも、彼に南太平洋の旅に出るきっかけを与えたのは、あるアメリカ人編集者が旅行記の連載を持ちかけたことだったのだ。

そう考えてみると、ここでスティーヴンソンが、否定的に用いている「エキゾチック」さの中に言葉の異質さを含めていることが、重要な意味を持っているように思われる。このことはとりわけ『闇の奥』との比較において『ファレサアの浜』が明らかにするものとして、注目に値する。

『闇の奥』のMarlowは、パリを拠点とする大貿易会社に雇われ、アフリカの「暗黒地帯」へと赴く。そこにおいて彼は、現地の言葉を理解しないのにも関わらず、下働きの黒人たちとの意思の伝達に苦勞している様子はない。

中央出張所に徒歩の行軍で向かう途中、運搬人たちの反抗や逃亡が絶えないのに業を煮やしたマーロウは、「ある晩、手真似をまじえて英語で演説をして

やったが、手真似のほうは、僕の前の 60 対の眼にてきめんに通じた」¹⁶。

また、白人 5 人に対して人喰人種を含む黒人 30 人が、汽船の乗組員として加わっているのだが (98)、マーロウは彼らとのコミュニケーションに何の障壁も感じないらしい。それは、濃霧の中、叫び声に引き続いて獰猛な争うような声 (savage discords) が起こる場面 (96) に顕著である。

黒人たちはそれを聞いても実に平静であり、その中の「数人が、短い、ブツブツ言うような言葉を交わしたが、それで皆の満足が行くように事が解決したようだった」(97)。そして、代表者がマーロウのそばにやってくる。彼らの相談の内容がわからないのにもかかわらず、マーロウは臆することなく親しげな挨拶をする。そして、「[叫び声の主たちを] 引っ捕らえろ。そいつ俺たちにくれ。([C]atch 'im. Give 'im to us.)」という奇妙な頼み、その目的が「そいつ食べる (Eat 'im!)」であることに対しても、マーロウは、彼らが人喰人種なのに肉はおろかるくな食事も与えられていなかったという事実を即座に参照して、さほど仰天しないばかりか、彼らへの同情さえ見せる (97)。

なお、この場面での黒人の代表者の発話は、クルツの死を伝える黒人ボーイのせりふ「ミスタア・クルツー 死んでる (Mistah Kurtz — he dead.)」(137)とともに、この小説において例外的に「野蛮人」が言葉を話す箇所であり、この文脈において注目値する。コンラッドが彼らに与える英語は、「白人」の正統的な英語ではないが、情報伝達にさしつかえることはなく、その異質さをもって、言語の透明性をかき乱すことはないのである¹⁷。

マーロウはまた、未知の原住民の存在にも、不安や危機感を覚えることはない。

船は、黒人たちの理解不能な狂乱状態のほとりを (on the edge of a black and incomprehensible frenzy) をゆっくりと根気よく進んでいった。あの先史時代人たちが我々を呪っているのか、祈りを捧げているのか、敬待してくれているのか。それは誰にもわからない。我々は、環境への理解から切り離されてしまっていた。(90-91)

船は、未知の野蛮人の領域へと押し入って行く。しかしそれは、マーロウの感性にとっては、「ほとり (edge)」を進むことなのであり、そこには接触はない。マーロウは、岸から起こる叫びや騒ぎ、岸からのひそかな視線から、心

理的に安全な距離を保ち、それらを「理解できない」「分からない」と繰り返す。それでいながら同時にマーロウが、彼らも自分たちと同じ人間であり、「あの野性的で情熱的な叫びが自分たちの遠い血縁である」ことを聞き手たちに説くとき（91）、そのような理解と共感、彼が19世紀末のヨーロッパの文化の枠内にいることを明白に示している。ダーウィンの進化論、フレイザーの民俗学などを受け、当時白人が「野蛮な」原住民と地続きであることがしきりに論じられた。マーロウが見ているのはあくまで自らの暗い分身であり、その限りで現実の原住民とは無関係の、内面の投射にほかならなかった。このような態度は、マーロウの予期していなかった原住民の襲撃に際してさえ保持され、マーロウの船がクルツを連れ去る場面において最も印象的に表れる。

その時「群衆が森の中から殺到してきて、裸の、息づく、揺れるブロンズ色の身体で空き地を埋め、傾斜地を覆ってしまった」（133）。そして彼らの「二千の目」は船をいつまでも見送る（133）。

クルツは操舵室に入れられていた。…寝床に横たわったまま、彼は開いた銃戸口から外をじっとにらんでいた。人々の群れに渦ができたかと思うと、あのヘルメットのような頭と黄褐色の頬をした女が、水際まで駆け出してきた。女は両手を突き出し、何か叫んだ。すると荒々しく興奮した群衆がそろってその叫びに和し、はっきりとした、早口の、息もつかぬ叫びのコーラスがとどろいた。

「わかりますか、あれが。」と私は尋ねた。

彼は、渴望と憎悪の入り混じった、燃えるあこがれの眼差しで、私を通り越して外を見つづけていた。彼は答えなかった。しかし、微笑が、いわくいいがたい意味のこもった微笑が、その血の気の失せた唇に浮かび、一瞬のうちに唇は痙攣するように歪んだ。「わからなくてどうする？」彼はゆっくりと、あえきながら言った。まるで、その言葉が超自然的な力によって彼からひきはがされていったかのように。（133-34）

これによってクルツと原住民たちの間に何らかの交感があることを確認したマーロウは、それ以上の質問をしない。彼は少し前に、クルツ礼賛者のロシア人青年が、酋長たちがどのようにクルツに敬意を表していたかを語り始めたとき、それを激しく遮っていた。「その話の詳細は、クルツ氏の窓の下、杭に刺

さってひからびているあのたくさんの首などよりもっと耐えがたいのではないか」という気がしたからだ(121)。原住民たちのことばかりでなく、彼らとクルツとの関係も、マーロウは半ば無意識的に理解の外に置く。その上で、彼は深い共感を示す。上の引用部分の直後、マーロウは、甲板にいる他の白人たちの面白半分銃撃から原住民たちを逃れさせるため、汽笛を鳴らすのである。

以上のように、マーロウの異文化との接触においては、現実にかかるようなさまざまな困難が捨象されている。本当に異質なものはただちに排除されるか内面化される。現実の原住民やその言語は、音や声や風景の一部としてしか存在していない。

それに対して、『ファレサアの浜』のウィルトシャーの言語体験は絶えざる「異質性」との遭遇であり、いかなる内面化も拒む他者との出会いの連続であった。

ウィルトシャーは、浜に到着したその日から、マーロウと同じく不可解さとの遭遇の連続となる。しかし、マーロウが現実の接触をすり抜けてほぼ滑らかに旅を進めることができるのとは対照的に、ウィルトシャーにとっては不可解さは程度の差はあれ大概是恐怖と同義となる。不可解な物事を不可解にしておく限り、恐怖を克服することができないため、不器用な奮闘を繰り返すことになり、それが物語のひとつの推進力になっているとさえいえる。

島に着いた翌朝、ウィルトシャーがベランダに出てみると、家の周りに人垣が出来ている。一日中、増えたり減ったりしながら、人の群れは真剣な面持ちを保って静かに家の方を凝視し続ける。ウィルトシャーは、内心威圧され恐いのだが、それをごまかすと同時に相手の意図を探るため、いくつかの行動に出る。「僕は〔ベランダの〕手すりに両腕をかけて、見つめ返してやった。誰もまばたきひとつしやしない」(113)。「僕は立ち上がって、のびをするふりをし、ベランダの階段を降り、川の方にぶらぶら歩いて行った。すると人から人へ、ざわめきが伝わっていった…。」(113)。あるいは、

僕は、時速5ノットで、用事のある人のように、ぐんぐん「3人の子どもたちが座っているほうへ」近づいていった。すると、3つの顔に、まばたきとごくっと何か飲み込むような感じが浮かぶのを見たと思った。(113)

そして子どもたちは慌てふためいて逃げ出し、人々は短く一声笑う。笑い声が止むとウィルトシャーも立ち止まる。子どもたちはまだ「沖に停泊する」に

至らず逃げていたが、ウィルトシャーは「上手回し（about ship）し、針路を逆にとった」（114）。ウィルトシャーは船乗りの言いまわしを多用するが、ここでは自らを船になぞらえる。マーロウの船が同様の集団的視線を容易にすり抜けて行くのとは対照的に、ウィルトシャーの「船」は不可解な群衆の中へとまっすぐに突っ込む。しかしその威嚇と虚勢交じりの身振りは、彼らとのコミュニケーションの糸口とはならないのである。

自分がタブーにされていると思いこんだウィルトシャーはケースに相談し、彼の計らいで酋長たちと会見する。会見の始まりはこのように語られる。

僕は〔見物の〕平民たちの興奮ぶりには少々狼狽したが、酋長たちの物静かな、礼儀正しい様子には安心した。ますます安心したのは、酋長たちの代表が低い声で長い演説を始めたときだ。彼は片手を時おりケースに向かって、時おり僕に向かって動かし、時おり敷物を握りこぶしで叩いた。ひとつだけ明白なことがあった——酋長たちには怒っている様子は全く見えなかった。

「あれは何を言っていたんだ」彼が演説を終えると、僕は〔ケースに〕尋ねた。

「ああ、酋長たちは君に会えて嬉しい、そして、君が何か苦情を申し立てたいということが僕の話でわかっているから、どんどん言うように、そうすればまっとうなことをしてあげようって、それだけだ。」

「それだけのことを言うのにずいぶん長い事かったものだね」と僕は言った。（121）

ウィルトシャーは、人々の態度、声の高さや調子、身振りをつぶさに観察し、意味を引き出そうとしている。彼の最後のせりふが示しているのは、通訳と頼んでいるケースへの不信感ではない。自分が音として耳にしていた言葉の長さと、彼の簡潔な訳とが釣り合っていないことへの違和感である。

ファレサアにおいては、同じ白人の間でさえ言葉の壁がたちだかる場合があることをウィルトシャーは経験する。散歩の途中で法衣を着た老齢の白人に出会ったウィルトシャーは声を掛ける。

「こんにちは、神父さん」と僕は言った。

彼は土語で熱心に挨拶を返した。

「英語は全然話さないんですか」と僕は言った。

「フランス語」と彼は言う。

「なるほど、では残念ながらどうしようもないですね。」と僕は言った。

彼は、しばらくフランス語で話しかけてみていたが、それからまた現地の言葉に戻った。それが一番うまくいくと思ったらしい。僕は彼が自分と暇つぶしをしたがっているのではなく、何か伝えたいことがあるのだと分かったので、熱心に聞いた。アダムズとケイスとランドルの名前が聴き取れたが、ランドルが一番たくさん出てきた。それから「毒」とかそんなような感じの語、それに彼が実にたくさん使ったある土語の単語が聴き取れた。僕はその土語を繰り返しつつぶやきながら家に帰った。

「ファッシ・オキって何のことだ」と僕はウマに尋ねた。自分に出来た発音はだいたいそんなところだった。

「“死なせる”」と彼女は言った。(115-16)

この「あまり汚いので、彼をペンにして紙に書けそうなほど」の Galoshes 神父は (115)、後に、ウィルトシャーに現地語とフランス語を同時に教えてやろうとして、彼を「バベルの塔よりひどく」混乱させもする (142)。

ウィルトシャーは、最初に船から島影を認めたとき、「ここには新たな経験がある。言葉だって僕には全く未知のものだろう」と考えていた (101)。彼が希望に充ちた新天地の構成要素としてまず想起したのが未知の言語だったのである。そして皮肉な事に、上陸した彼をまっさきに襲う異質性が、未知の言語だった。彼が投げ込まれるのは、通訳がなければ意思疎通が困難で、自分自身の名前も Welsher (133) あるいは Vilivili (156) という聞きなれぬものに変化させられてしまう、そんな異言語の世界なのである。

スティーヴンソンは、内容においてのみならず、語りのレベルにおいても、異言語の異質性を読者に追体験させる工夫をしている。即ち、語り手、作者による翻訳や注釈の行為である。

語り手ウィルトシャーは、しばしば原住民の言葉をそのまま写し取り、そこに翻訳や注釈を加えてみせている。

僕は家に帰り、ウマにお前はポーピー (Popey) かと尋ねた。僕はそれが

ここの土地の言葉で旧教徒を指すものとわかったのだ。

'E le ai!' と彼女は言った。ウマはいつも、ふつうより強く「いいえ」を言いたいときに土地の言葉を使うのだった…。(118)

あるいはまた、ウィルトシャーがウマの話を要約して示す場合もある。

ウマはたくさん僕にしゃべった……自分自身と母親とケイスのことをたくさんしゃべった。僕がもしそのすべてを Beach de Mar [ウマの話す混成語の名] で書きとめたとすれば、きわめて退屈で、何ページも埋め尽くしてしまうだろう。(128)

このような但し書きは、語り手ウィルトシャーの媒介で物語を受け取っていることを読者に強く意識させる。さらに、2つの異言語への作者脚註——ウマの叫び *'Aue!'* に *'Alas!'* (134), ウマの返事 *'Io'e,* に *'Yes.'* (161)——もまた、同種の効果を上げ、読者は、媒介者なしには受け取れないような異質なテクストを、スティーヴンソンの媒介で受け取っているのだということを意識させられることになる。

しかし、以上のように、物語中のウィルトシャーと読者とが投げ込まれている異質な言語の世界の中心に、スティーヴンソンが別の言語空間を用意していることを忘れてはならない。それは、ウマの話す Beach de Mar の空間である。この作品が中心的に扱っている植民地的接触は、英国人男性と島の女性の結婚であり、この2人の間で用いられるのが英語と土着語の混成語であるという、異人種間の交渉と異言語間の交渉のパラレルがここに見られる。別の言い方をするならば、『ファレサアの浜』に固有の混成語の空間は、この作品の示している植民地的接触の特性、即ち文化の交渉を反映している。異言語の空間のない『闇の奥』には、このような混成語の空間もなかった。原住民の間をすり抜けて進むマローウと、原住民の中へと入りこみ変容を遂げるクルツとに代表される2つの極端な植民地的接触の様式は、このような言語空間の存在を許さない。一方、『ファレサアの浜』においてウィルトシャーは読者とともに異質な言語を経験し、くぐり抜けていかなければならない。スティーヴンソンが「リアリスティックな」と自ら呼んだ南洋のエキゾチシズムの根底には、こうした異言語体験が据えられているのである。

2

ケイスとクルツには役回りの上で似ているところがあるのは確かである。しかし、ケイスは、クルツと比べ得るような「悪」ではなく、蕃地で異様な内面的変貌を遂げてもない。彼は、土地の言葉・文化と文明国の言葉・技術に精通していることを、ファレサアという地で悪用している人間である。

ウィルトシャーをファレサアに運んだ船の船長によれば、彼の2代前に派遣された John Adams は最初はここでの仕事を喜んでいて。しかし、次に会ったときには「原住民たちだか、白人たちだか、何だかとうまういかないとかで」すっかり違う口ぶりだった (101)。そして、船長が次にファレサアに来たときにはもう病気で亡くなってしまっていた。原因は、「島のせいだとか、厄介事のためだとか、何だとか考えられていました」(102)。

船長が「…か (or)」を重ねる曖昧な物言いをするのは、ケイスがアダムズを毒殺したという浜の噂を新来のウィルトシャーに対して隠そうとする慎重さのためかもしれない。彼は、「[ケイスと黒人ジャック] は、ひどく評判が悪いんですが、浜というのが何たる噂の場であるかご存知でしょう」とウィルトシャーに言っている (102)。或いはこれは、彼にとってはファレサアはひとつの経由地に過ぎないことからの無知を示しているだけなのかもしれない。しかし、いずれにせよ、船長の言葉は、ケイスという人物に特徴的な帰属性のなさをいみじくも言い当てているように思われる。

彼がどこの国の出身なのかは、彼が英語を話すことよりほか、誰にもわからなかった。…彼は、そうしようと思えば、応接間にもふさわしい口をきくことができた。そしてそうしようと思えばヤンキーの水夫長よりひどいののしり言葉も使えるし、こしゃくな話し方でカナカ〔南洋諸島の原住民〕を閉口させることもできた。その時点で一番得になると彼が考えるやり方、それがケイスのやり方で、そういうことが常にすらすらできてしまふようだった。まるで生まれつきみたい。(103)

ケイスに与えられている最大の特性は、すぐれた言語能力である。彼は、土地の言葉と英語を話せるのはもちろん、場に応じてさまざまな話し方を自然に

できる人物として導入される。この変幻自在さには、言語能力だけではなく、高度な演技力も関わっている。

ケイスは、ときに原住民を畏怖させるために演技する。たとえば、彼は魔物たちの棲みかと考えられている叢林地を自由に出入りしてみせる。そして、勇気を示して同行した人々は、「彼が死者たちと話し、命令を与えるのを聞いた」り、「祈りの力で数々の奇蹟を行った」のを見たりする（145）。それに、彼の自作の舞台装置と小道具の効果も加わって、ケイスが魔王ティアポロのようなものかその息子であるという信仰あるいは迷信めいた噂がファレサアに広まるのである。

このように、巧みな演技によって、自分をファレサアの中で特権的な立場に置くことのできるケイスであるが、場合によっては、自分を原住民と同じ地平に置くこともする。宣教師タールトンが語る、ウィルトシャーの3代前の前任者 Underhill をめぐる挿話が、そのことを示している。

[アンダーヒル] は中風で身体全体がきかなくなり、片方の眼だけしか動かせなくて、それをしょっちゅうばちばちやっていたそうです。この自分でどうすることもできない老人が今や悪魔であるという噂が突如生じて、この悪漢ケイスが土地の人たちの恐怖に働きかけ、自分も同じように怖いと偽って (worked upon the natives' fears, which he professed to share), 老人の家にはひとりではとても入る勇気がないようなふりをしました。(138)

この恐ろしい噂の出所がケイスであったかどうかは言明されていないが、確実なのは、ケイスが原住民たちと恐怖を「共有 (share)」しているふりをしたことである。

以上のように、ケイスはその言語能力、演技力によって、国籍不明となり——そのことと同調するように、彼は白人であるが「黄色で小柄」(103)であるという身体的特徴を与えられている——、場合によって白人、文明人として振舞うこともできれば、原住民の世界に同化したり君臨したりすることも可能になるのである。その変幻自在ぶりが極端に集約的に表れるのが、次の場面である。

ケイスは、理由もなくタブーにされていると思って相談に来たウィルトシャー

に、次のように話す。

…この島の土民がこう生意気になっては、次にどうなることかわかりませんよ。白人への敬意などという考えは、全く失われてしまったんです。我々に必要なのは、軍艦ですね。できればドイツのがいいな。あいつらなら土民をどう抑えればいいかわかっていますから。(120)

僕は、これをあなたの言い分 (your quarrel) だとは考えていないんです。…僕はこれを、我々の言い分だと考えます。僕はこれを“白人の言い分”だと考えます。だから僕は何かあろうとも守り通しますよ。さあ、お約束です。(120-121)

会見の場において、ウィルトシャーは、通訳してくれるはずのケイスに向かって言う。「僕が何者か言ってやってくれ。僕は白人だ、そして英国臣民だ、そして本国ではすごい大きな酋長なのだ。それから、僕は、彼らに利益を与えて、文明をもたらすためにここにやって来たのだ」(122)。ウィルトシャーが全編通じて隠すことのない原住民蔑視と白人優越主義が、ここにおいてのみ、明白に白人の使命と結び付けられている。ここでは、ケイスとウィルトシャーは、帝国主義の言説を共有する白人として並ぶことになる。複数の文明国が覇権を握る南海において、国籍不明のケイスと大英帝国代表のウィルトシャーが白人として手を結び、土民の抵抗を抑えこむという図式が明確に描かれる。

しかし、ケイスの陰謀が露見してみればウィルトシャーにも容易に推測できることだが、ケイスはこの会見において、“白人の言い分”を主張していたのではなく、タブー同然のウマをウィルトシャーと結婚させたことなどについて尋問する酋長たちに対し、弁明をしていたらしい。

会見終了後、ケイスは、自分も「要するに、怖い」のでこれ以上ウィルトシャーに関係したくないと言い、手の裏を返したように、“白人の言い分”の勝ちさを批判する(124)。

あなたはタブーにされているわけではないんですからね。島の者があなたに近づきたがらない、それだけのことなんです。では誰がそうさせているというんでしょう？ まったく、我々貿易商はとてもあつかましいんです

よ。我々は、たまたま自分に都合がよいということになれば、このあわれな島民たちに、彼らの法律を取り消させたり、タブーをまた始めさせたりなんかする。しかし、あなたは、島の者に否応なしにあなたの店と取引をせよという法律を期待していると言うつもりはないんでしょうね。… (124-125)

ケイスは、白人代表として振舞う必要がなくなれば、原住民の代弁者へと臆面もなく早変わりできるのである。彼は、その言語能力、演技力、そして2つの文化に精通していることにより、原住民の恐怖を「共有」することもでき、支配者の論理・被支配者側の言い分を等しい説得力をもって語ることができる存在である。

ケイスはこの能力を、専ら商売敵の白人を消すためと、原住民の人心を左右するため——後者は前者の手段になる場合もある——に使っている。

既に触れたアンダーヒルの不幸についてのタールトンの語りは、次のように締めくくられる。

この悪漢ケイスが土地の人たちの恐怖に働きかけ、自分も同じように怖いと偽って、老人の家にひとりではとても入る勇気がないようなふりをしました。しまいには墓が掘られ、まだ生きている身体が村のずうっと外れに埋められたのです。(138)

墓を掘るように指示したのはケイスではないらしい。「しまいには」の1語で突如生じる時間の空隙は、そこになんらかのケイスの教唆の力が働いたことを暗示している。この教唆の力は、同じくタールトンによって語られるヴィガーズ追放事件にも見ることができる。

タールトンは、自分が教育した原住民の牧師 Namu から、自分の信者たちが「カトリック教徒のするようなことを採用して」いるからすぐに来てくれという手紙を受け取る (136)。タールトンが到着したのは、ヴィガーズが突然にファレシアの浜を去った後だったが、ナムはすっかり落ち着いていて手紙を出したことを恥じていた。タールトンの詰問に、ナムはしぶしぶ次のような告白をする。

人々が十字を切ることを始めたので驚いたのだが、その理由がわかって安心

した。ヴィガーズは、Evil Eye — ヨーロッパにあるイタリアという名の国にはよくある — の持ち主だった。人を殺すこともあるというその魔力を避けるために十字を切っていたのだ。そして、イーヴル・アイのことを教えていたのはケイスだった。

タールトンの語りは、ヴィガーズとイーヴル・アイを結びつけたのがケイスであったかどうかを明確にしない。確かなのは、ケイスがヨーロッパの迷信である「邪眼 (evil eye)」を導入したことが、ヴィガーズに十字を切るという原住民集団の行為につながったということだけである¹²。

ケイスはまた、白人の目には子供だましの簡単な手品や技術を用いて、原住民を畏怖させる。タールトンは、ケイスの手品のおかげで原住民たちの前で威信を失いかねないほどひどい目にあっている。

タールトンは、原住民へのケイスの悪影響を断つため、日曜日の説教で、聖書を典拠に「本当の霊の力 (the true spiritual power)」を明らかにしてみせる。その際ヴィガーズの事件にもはっきりと言及した。また、彼はナムに改悔の情を語らせる。このようなタールトンの反撃を知って、

…その日の午後、[ケイス] は、村の真中で私に会う機会をつくりました。…「どうやら、神聖な方のお出ました」と彼は、島の言葉で言うのです。「この方は、私に対抗する説教をされていた。しかし、それは、この方の心の中にはないことでした。この方は、神の愛を説かれた。しかし、それはこの方の心の中にはないことでした。あなた方は、何がこの方の心の中にあったのか、知りたいか？」と彼は叫びました。「私があなた方にお見せしよう！」そして、さっと私の手¹³をつかむとそこから1ドル貨を引き出したかのようにみせかけ、高く掲げてみせたのです。(139)

ケイスの、この奇蹟のパフォーマンスは、土地の群衆の目に驚異と映るばかりでなく、タールトンをも呆然とさせる。勿論、両者の驚きの理由は異なる。

こんなものはよくある手品で、本国では何十回となく見たことがあります。でも、どうやって村人たちにそのことを納得させたらよいのでしょうか。私は、ヘブライ語などよりペテンの手品を習っておけばよかった、あの男に彼自身のコインで支払って懲らしめてやる (paid the fellow out) こと

ができたのに、と思いました。(140)

タールトンにできたのは、もう自分の身体に触らないでいただきたい、とケイスに言うことだけである。それに対してケイスは、触るつもりもなければ、あなたの金を取る気もないと、金をタールトンの足元に投げて立ち去る。

ここでタールトンは、同じ手品ができれば仕返しのできたのにと悔しがっているが、果たしてそうであろうか。彼のケイスの手口への理解は一貫して一面的であるようだ。

実はこの時、布教活動への「原住民の寄付 (the native contributions)」が集められる時期が近づいており、しかも、タールトンがそのことを知らせる係になっていた (139)。タールトン自身気づいているように、ケイスはそのような事情を利用したのである。この手品は、単に原住民を驚かせるという以上の意味を持っている。

この手品は、タールトンが疑うことなく依拠する枠組み、教会が原住民の物質的貢献を期待することが暗黙の了解となっている枠組みを暴露してしまうのだ。タールトンは、自分は「この島々のために善いことをすることに、あなた [ウィルトシャー] が美しい奥さんを喜ばせ保護するのに熱心になるのと同じくらい熱心」であると言う (138)。それが彼の考える布教活動である。しかし、その一環である原住民からの寄付を募るという行為は、ケイスによって金への執心へと容易に読み換えられてしまうのである。

このように見てみると、ここでケイスのしていることは Stephen Greenblatt の「即興演技 (improvisation)」の観点から考えることができるだろう。グリーンプラットは、ルネサンス期のヨーロッパ人の新世界への進出——ケイスやウィルトシャーが関わっている帝国主義的拡張の最初の一步——に際してヨーロッパ人が用いた機略を指し、次のように述べている。

[私が即興演技と呼ぶもの]によって意味するのは、予期されなかったものを利用し、また、与えられた素材を自分のシナリオに沿うように変形させる能力である。即興演技といっても、ここで不可欠なのは、興に応ずる当意即妙の才より、固定され確立され (established) ているように見えるものを自分の都合に合わせて把握する能力である¹⁴。

また、即興演技が「まず第一に、役を演ずる、つまり自分を——たとえごくわずかのあいだでも、そして、内面的には保留しつつであっても——他者に変容させる能力と意欲に依拠している」(228)ものであるとすれば、それはまさしくケイスの得意とするところだった。彼は計算された演技をし、相手の体系を自分のために使うことができる。

3

ケイスは、自分の敵とみなす相手を相当悪賢い方法で嵌め、その破滅も手伝ってきたらしい。しかし、ウィルトシャーに関しては、ケイスはウマと結婚させるということだけで十分に目的を達した。それにもかかわらず、その後、2人の対立が死闘へと発展してしまうのは、逆に復讐心と警戒心を募らせるウィルトシャーが、夜の叢林地を舞台に積極的な行動を起こすからである。

ウィルトシャーは、ケイスに向かって、「俺はアンダーヒルみたいな中風病みじゃないぞ。俺の名はアダムズではない。ヴィガーズでもない。だから俺はお前に、好敵手である (you've met your match) ことを見せてやる」と挑みかかる (154)。なぜ、ウィルトシャーはケイスの「好敵手」となりえたのか。彼はケイスになす術もなく嵌められたらしい前任者たち、あるいはまたタールトンと、どこが違うのだろうか。

ケイスの計略の多くが、ファレサアの人々を恐れさせることを要としている。彼はタールトン相手のパフォーマンスを「村の真中で」行い、はたして彼は「群衆」を驚かせてタールトンを虚仮にすることができた (139, 140)。ウィルトシャーの場合は、タブー同然の女と結婚した男に何が起るか、怖いものみたさの群衆が、半円を描くように家の側面を固め、一日中見張りつづける。ウィルトシャーの家が舞台なのである。ウィルトシャーは、自分の絞首刑を人々が見に来ているような感じを覚えたり、ベランダを下りて彼らのほうに向かって行ったときに起こったざわめきを「劇場で幕が上がる時のような」と形容したりしている (113)。ケイスの企みが生むのは、観客を集めるパフォーマンスなのだ。

しかし、ウィルトシャーには、タールトンと違って、ケイスの準備した舞台から逃れる先があった。彼が家の中に入ってウマに「あんな馬鹿どもは見ることがない」と言い、ウマの「何も知らない人たちよ」という同意を得るとき

(114)、彼は、この時点ではまだウマをパートナーと認めようとしていないのにもかかわらず、他者の眼差しにさらされた舞台の真中に、2人のプライベートで安全な場所を得ていることになる。

ケースの陰謀は、ウィルトシャーをファレシアの社交から締め出す。それはウィルトシャーの住まいも兼ねた営業所（パブリックな空間）が、住まい（プライベートな空間）としてしか機能しなくなることでもある。しかしそのことが逆説的にウィルトシャーにとって積極的な意味を生む。

ウィルトシャーにとっては、「ここで英語を話す取るに足る唯一の人物」（125）であったケースに代わって、ウマが「[この] 奇妙な土地での唯一の味方 (friend)」(127)となる。そしてウィルトシャーは、外で遭遇した未知のものを家に持ち帰り、既知のものへと変えることができるのだ。ウィルトシャーは、外で聞いた知らない単語を唱えながら帰宅してウマに意味を尋ねる（116, 145）。あるいは、ファレシアの人々が「いっばいの魔物」を恐れて叢林地に出入りしないことを知ったウィルトシャーは（144）、その詳しい説明をウマから引き出すことによって、ケースへの報復作戦の糸口をつかむ。ウィルトシャーはこのようにして、土地の言語・文化に精通することで絶対的な優位に立っているとされたケースに対抗していくことが可能になる。

しかし、ここにとりあえず認められる、他者の脅威とそこからの避難所としての家庭空間、という二項対立が、ウマが半ば他者であることによって実は初めから揺らいでいることは、指摘しておかなくてはならない。

ウィルトシャーは「妻」となったウマの案内で住まいを兼ねた営業所に向かう途中、ウマが「まるで故国の娘であるかのように思え」、しばし我を忘れて手をつないで歩いたり、先に走って行く彼女をいとしい思いで見つめつつゆっくり追ったりする（110）。しかし、ウマが先に家に入ってあかりをつけ、運び込まれた荷物が乱雑に積まれた部屋の真中に立ったとき、ウィルトシャーは窓越しに、さきほどまでとは違うウマの姿を見る。「彼女の影は彼女の後ろを長く這い上がり、鉄の天井のくぼみにまで伸びていた。ウマはその影を背に立っていたが、ランプの光が膚に照り映え、輝いていた」（111）。

ウィルトシャーはウマに同国人の女性を見出す。その一方で、彼は、ウマの巨大な影が家の空間を支配し、また彼女の身体が光を反射するのを見る。このコントラストは、ウィルトシャーにとって、ウマが身近な存在であると同時に計り知れない他者であることを暗示するかのようである。この潜在的なアンビ

ヴァレンスが最も劇的に表れるのは、ウィルトシャーが夜の叢林地で「魔物の女 (devil-woman)」と遭遇する場面である。それは、「[ウィルトシャーが] 思い描いていたとおりの姿」をしていた。そして、「[自分のランタンの] 光がその女のむき出しの両腕と輝く両目に照り映えるのを見」た彼は、恐怖に悲鳴を上げる (161)。ところがそれは、ウィルトシャーの助けになるべく、恐怖に耐えて彼を追ってきたウマだったのである。

また、ウィルトシャーとウマが、結婚式を挙げてくれたタールトンのために食事を用意する場面では、ウマの土着性が西洋的なものとははっきりと対立し、打ち負かす。ウマは「神の作り給いし最も下手な料理人」であるのだが (128)、ウィルトシャーは、妻も料理に参加しているところをタールトンに見せびらかしたいと考える。そして、いつもは自分の淹れる紅茶を淹れさせるが、それは彼がいまだかつて飲んだことのないような味だった (135)。

しかし、それはまだましだったのだ。というのは、[ウマ] は塩入れを持って歩きまわり、それがヨーロッパらしさを加えるものだと考えたのだろう、僕のシチューを海水に変えてしまった。(135)

ウマの手にかかると、イギリス人ウィルトシャーの習慣的な飲み物が、なじみのない味に変わる。シチューもまた、そのヨーロッパらしい味を失い、グローバルに広がる海水と化す。ここで、ウマが料理下手であること (128) や、食事の用意をし忘れる (125)、食後の片付けをすぐにしない (134)、などといったことが、当時のイギリスで期待されていた女性像、夫を支え家庭を切り盛りする妻、から著しく逸脱していることを指摘しておいてもよいだろう。

このように、ファレサアの共同体から白人の常識では考えられない方法で締め出されたウィルトシャーの依拠する家庭は、それ自体、異質なものの顕現であった。このことは、ドイツ語の *heimlich* がその意味の多様なニュアンスのうちに、反対語 *unheimlich* と一致するニュアンスを示しているというフロイトの指摘を思い起こさせる。*'heimlich'* がもともととは「家庭的な、親密な」という意味だったのが、「閉ざされた、秘密の、はっきりしない」といった意味を帯びるようになり、ついには正反対の *'unheimlich'* が持っている「無気味な」という意味を持つようになったという変遷をふまえ、フロイトは「*unheimlich* はつまり *heimlich* のある一種類なのである」としている¹⁵。

ウィルトシャーにとっては、家庭という本来ドメスティックな場が、エキゾチックなものと分かち難く結びついているのだ。ここまで来ると、ステューヴンソンが、エキゾチックな土地・文化を背景とするこの小説を「真正の家庭小説 (sterling domestic fiction)」¹⁶と呼んでいることが、この結びつきと関連していることが理解できる。Roslyn Jolly の述べるように、「[ステューヴンソンのこの発言は] 当時、植民地空間と非ヨーロッパ文化をフィクションの中で用いるときの特徴であった、ドメスティックなものとエキゾチックなものとが対極にあるという前提を突き崩している」¹⁷のだ。ジョリーはその裏付けとして、ウィルトシャーの語りの言語が、エキゾチックな内容をドメスティックなものへと変える働きをしていることを示している。このようなジョリーの作品分析は示唆に富んでいるが、ジョリーは、ウィルトシャーとウマの家庭が、既に述べたビーチ・ド・マールという混成語の空間でもあることには言及していない。

ステューヴンソンは、『南海にて (*In the South Seas*)』で、正式には 'Beach-la-Mar' と呼ばれるこの混成語の普及について触れ、この「有用なビジン」は「太平洋の言語 (the tongue of the Pacific)」と呼んでも構わないだろうと述べている¹⁸。しかし、『ファレサアの浜』においては、この混成語はウィルトシャーとウマの間以外ではほとんど用いられず、2人の私的な言語として提示されている。別の言い方をするならば、ドメスティックなものとエキゾチックなものとが混在しているウィルトシャーとウマの家庭の構造が、言語の面で実現されたものが、ビーチ・ド・マールなのである。

そして、このような混成語を許す空間を持っていること、それがウィルトシャーがケイスと違うところであり、ウィルトシャーを勝利に導く条件であった。ケイスは、2つの言語を自由に操り、2つの文化に精通し、文化間の差異と類似を利用して、パブリックな空間で原住民、白人の双方を自分の思い通りに動かす。しかし、その卓越した言語能力にもかかわらず、ケイスはあくまで「2つの」言語、「2つの」文化の間を行き来するに過ぎない。言い換えるなら、彼はこの島の複数の文化のどれに対しても「外側」にとどまっているのだ。

そのケイスの限界は、ケイスとサモア人の妻との間のコミュニケーションの不在という形で表されている。ケイスは、キャプテン・ランドルの家に黒人ジャック——但し、この地では、原住民以外は皆「白人」に分類される——とともに寄生している。その3人の白人男性の生活空間には、ケイスの妻の居場

所が見当たらない。彼女には名前さえ与えられていないのだ¹⁹。ウィルトシャーはケイスのたったひとつのとりえを「妻のことを好きで、優しくした」ことだと述べているのだが（103）、その証拠として上がっていることは、ケイスが遺言で全財産を妻の名義にしていたということだけである。つまり、物語の中で、ケイスと妻との間のコミュニケーションは、ケイスの遺言という形でしか行われない。しかも、妻はサモアにすぐに帰りがっていたため、ウィルトシャーが買いとってやることによって、ケイスの遺産は初めて妻の役に立つことになる。

2つの言語の間の行き来に終始する人物として、ケイスは、ウィルトシャーの持っているプライベートな混成語の空間を手に入れられなかった。ケイスには「家庭」が存在しないのとは対照的に、ウィルトシャーとウマの家庭は、英語と混成語が交わされる豊かなコミュニケーションの空間である。そこはウィルトシャーにとって、外から持ち帰った土地の言葉や文化を説明してもらえる唯一の場でもある。このプライベートな空間で得られた知見によって、ウィルトシャーは能力的にも経験的にもはるかに勝るケイスに対抗することができた。

商売ができないのは自分のせいだからと別れを口にするウマに対して、ウィルトシャーは次のように語る。

'Uma,' said I, 'hear reason. I didn't know, and that's a fact; and Case seems to have played it pretty mean upon the pair of us. But I do know now, and I don't mind; I love you too much. You no go 'way, you no leave me, I too much sorry.' (126)

理を説くウィルトシャーの英語が、3行目のセミコロンを境に愛を語るビーチ・ド・マールへと自然に移っていく。ウィルトシャーのこのハイブリッドな愛の告白によって、ウマはウィルトシャーのもとにとどまることになる。こうして、ビーチ・ド・マールという混成言語によって、ハイブリッドな家庭空間が可能になるのである。『ファレサアの浜』は、スティーヴンソンには珍しい男女の愛の物語になっている。しかし狭義のロマンスであると同時に、帝国主義がもたらした異文化混交の現実を描いたきわめてリアルな作品でもあるのだ。

《注》

- 1 死後出版された南太平洋の島々の見聞記 *In the South Seas* の記述との対応関係については, Hillier, Robert Irwin, *The South Seas Fiction of Robert Louis Stevenson*, NY: Peter Lang, 1989, pp. 157-93 に詳しい。
- 2 テキストは Stevenson, Robert Louis, 'The Beach of Falesá' in *Dr Jekyll and Mr Hyde and Other Stories*, London: Penguin, 1979, pp. 99-169. 以下同書からの引用は, 本文中にページ数を記す。
- 3 この作品が初めて本として出版されたとき, 「一夜」では不道德ということで「1週間」に変更された。このテキストでは, スティーヴンソンの当初の意図に従って「一夜」に戻されている。野呂正「『ファレザの浜辺』について」(中央大学人文科学研究所編『喪失と覚醒——19世紀後半から20世紀への英文学』中央大学出版部, 2001年)には, 変更の経緯が, Barry Menikoff の研究成果をふまえてまとめられている (pp. 64-68)。
- 4 ヤシ油などの原料。南太平洋の当時の主な交易品であった。
- 5 たとえば, McLynn, Frank, *Robert Louis Stevenson*, NY: Random House, 1993, p. 409; Brantlinger, Patrick, *Rule of Darkness: British Literature and Imperialism, 1830-1914*, Ithaca: Cornell UP, 1988, p. 39.
- 6 Guerard, Albert J., *Conrad the Novelist* (1958), Cambridge: Harvard UP, 1962, p. 43n.
- 7 Booth and Mehew eds., *The Letters of Robert Louis Stevenson*, vol. 7, New Haven: Yale UP, 1995, pp. 366-67.
- 8 *Letters*, vol. 7, p. 161.
- 9 Maixner, Paul, ed, *Robert Louis Stevenson: The Critical Heritage*, London: Routledge and Kegan Paul, 1981, p. 422.
- 10 Conrad, Joseph, *Youth/Heart of Darkness/The End of the Tether*, London: Penguin, 1995, p. 70. 以下, 本書からの引用は本文中にページ数を示す。
- 11 この小説を露骨なレイシズムの表現と断ずる Achebe は, この2箇所を, コンラッド一流の野蛮人への暴行の好例として挙げる。コンラッドがここで一貫性を犠牲にして野蛮人に言葉を与えたのは, 小説の効果を考慮した結果に過ぎないとするアチェベは, その言葉を 'English speech' として扱っている。Achebe, Chinua, 'An Image of Africa: Racism in Conrad's *Heart of Darkness*,' rpt. in Kimbrough, Robert, ed., *Heart of Darkness: Third Edition*, NY: Norton, 1988, pp. 255-56.
- 12 タールトンは, 単純に, 自分の育てた牧師ナムをはじめとする原住民がケイスに唯々諾々と従っていると考えている。しかし, これは, 原住民の主体性を不当に無視していることになる。ナムは, 旧教徒のように十字を切る事によって魔除けをすることを正当化する論理を, 聖書や説教のアレゴリーの方法, そして聖書の言葉そのものを援用しつつ, 自ら立てている。
- 13 これは, 後のウィルトシャーの「彼がタールトン氏の頭から1ドル取り出したように」(145) という語りと矛盾する。また, スティーヴンソン自身が, 雑誌連載中の挿絵画家への手紙の中で, 「タールトン氏の頭——頭です。手ではなく。あのとんまたち [出版社] はそう印刷してしまったのですが——からケイスが1ド

ルを取り出すところ」と記している (*Letters*, vol. 7, p. 376)。

- 14 Greenblatt, Stephen, *Renaissance Self-Fashioning: from More to Shakespeare*, Chicago: U of Chicago P, 1980, p. 227. 以下、本書からの引用は文中にページ数を記す。なお、日本語訳は、高田茂樹訳『ルネサンスの自己成型 モアからシェイクスピアまで』(みすず書房, 1992年)より、一部変更して使用した。
- 15 ジークムント・フロイト, 「無気味なもの」, 高橋義孝訳, 『フロイト著作集 3』人文書院, 1969年, pp. 327-334.
- 16 Sidney Colvin 宛 1891年9月28日付書簡 (*Letters*, vol. 7, p. 161)
- 17 Jolly, Roslyn, 'Stevenson's "Sterling Domestic Fiction"', "The Beach of Falesá", *The Review of English Studies, New Series*, vol. 50, No. 200 (1999), p. 470.
- 18 Stevenson, R. L., *In the South Seas* (1896), London: Penguin, 1998, p. 10; ch. 2.
- 19 ケイスの妻が登場するのは一度だけ、それもウィルトシャーに食事を出す係としてであって、全く声を与えられていない (p. 107)。

(イギリス文学・第一教養部専任講師)